

心中二枚繪草紙

作者 近松門左衛門

上の巻

今年の酉—寶永二年
顔見世—初芝居
翁の面—芝居の
初めに舞ふ翁の
面、色白き故初
霜の白きと置き
とにかく
馴染—無しにか
け、お出は客の
お出と日の出
に、久方は久し
に掛けたり
天地を動かし—
以下古今集の序
文をもぐる
竹の紋—竹本筑
後掾の紋
日も紐—にか

既に今年こゝしの酉うしもたち皮いぬの顔見世かほみせ、朝木戸あさきぎをあけほの深く提燈ちやうちんの、影かげきら／＼と初霜はつしもの、翁おきなの面めんのにこやかに、始まり呼よばふ聲こゑに引かれて、老おいも若わかひも見みる人は、餘念よねん馴染なじみに御ご最良ひいきに、よふお出でやつた朝日影あさひかげ、御代みよも御國みくにも久方ひさかたの、此こゝの日の本のほんのならはしの、歌うたを種たねなる謠物うたひもの、天地あまのつちを動うごかし鬼神おにを感じかせしめやかに、妹脊いもせも猛たけき武士もののふも、心こゝろやはらか饅頭まんじゅうや、菓子かしに火蠅ひたばに番付ばんづけと、賣うる聲こゑにまで節籠ふじこもる、竹たけの紋もんつく道行みちゆきの、本ほんを召めせ／＼目關笠めせきかさ、笠かさも預あづかる預あづかけて御座ござれ。紅もみのくけひも淺黄あさぎ紐ひもゑ、繁昌はんじやう々々まうぜん、イヤ此こゝ所じやう繁昌まうぜん毛氈せんし敷し島しまの、その難波津ななばづの冬籠ふゆこもり、今いまを春はるべの顔見世かほみせに、日ひもなが事ことの御退屈ごたいくつ。はや今日けふのお暇いとまと、散ちらし太鼓たいこの下したとどろき、明日あすはとふから唐錦からにしきいろ、色いろどる空そらは夕陽せきやうの、山やまは夕ゆふの雲うゑの帶おび、腰こしの廻まはりの御用心ごよしん。おすまい／＼、おすまい日ひの入りくる人かへや歸かへるさや、花山はなやまの暮まか袖そで續つく、貴き

け、繁昌に半疊敷島に布くをか
 雞波津一王仁の歌
 とふから一早く
 お出で
 おすまい一芝居のはねに人込みの様
 佛金色一曾根崎
 心中の終りに未
 來成佛云々とある
 を取つていふ
 さんろの道行一
 さんろは用明帝
 の草薙になり給
 ひし時の名、此
 事は用明天皇職
 人鑑にあり
 くぢ一愚痴か
 また一まだか
 いろは船一淺き
 意
 初尾花一惚れた
 る様の色に現は
 る

賤群集は冬ながら、心ぞ彌生と三重なりにける。中に家名も君が名も、世上に高き天菫屋の、お島といひて彼の里に、おはつが跡繼隠れなし。此比あかしの貞といふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ連れて出る。いづくはあれど曾根崎の、縁の芝居初様も、定めし佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果れば繫がせし、屋形に皆々乗出す。提重開き替間ども、「なんと島様今日のさんろの道行は、本で語ると直に聞とは又各別、大盡様のお慰み、船の著く迄道行を、所望々々」とどよめけば、貞イヤこりやよかる。己も島の一弟子で、よつほど節は覺えたが、おつ付島を引摺み、國へ連れていつたり共國元は堅い所、こんな遊は成がたし。此船中をぶらくと、たゞ行もくぢの至大坂の名残に少と聽聞致したし。サア皆つけやや」といひければ、供の丁稚が懐中の、本取出してお島に渡し、「東西々々、此所がさんろ草刈の道行、師弟連節東西々々、歌おきに戀路のく、またいろは船、惚てほの字の帆が見ゆる。ほの字のく、誰にく、ほの字のはつお花、小すけしらすけいわますけ、此の一むらは刈残せ、妻ごめの夜の床にせん。時の虫と諸共に、刈取る鎌の鋭くも、聲きりく、す轡虫、牛のくらにも音を泣きて、歸る家路を松虫や。さらば笹原小蟹の、秋に染糸繰出し、五百機立てし機織や。そ

古郷の風―胡馬
依北風越鳥巢
兩枝(文選)
べう―犬の鳴聲
に豊後の別府村
をかく

牡鹿の苑―鹿野
苑、獨尊比丘を
度し給へる所
(釋氏要覽)
しこ草―玉世姫
の繯母

燈臺―鈴籠花、
燈臺下暗しの鏡
相換取草―蓮
班女―漢の成帝
の愛妾後に趙飛
燕の爲に寵を奪
はる
さりとは―嗚呼

の藤袴破るなど、泣くかいばらのつるさきに、野飼の駒の優くも、古郷の風の北に嘶へて嘶けば、越路の雪にふる郷の、空を慕ひて泣く犬の、べうの湯本はあれとかや。いかにははんや久方の、天津雲井をあまさがり、賤の仕業はいつ君が、ゑにかくならで思ひきや、見しや聞きしやとばかりに、草も刈兼ね忍び兼ね、涙をうけて研ぐ鎌の、砥石も心碎けとや。夢にも斯くとしら玉の、玉世の姫は「胎内の、未見ぬやとの別れぞ」と、つれなき母に誘はれ、行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀る牡鹿の、そのと法の導きこれなれや。互ひに夫と道芝の縊るばかりの戀草も、芽は繁りそふ母子草、千草八千草思ひ草、恐ろし鬼のしこ草に隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす、心ぞ思ひ遣られたる。草ばし刈るな笛を吹け。野路に兩人が悔み草。毒の草をも身の上と、知らぬ手元の暗さには燈臺草をクドキ歌思ひ出す。思ひ出すや有し夜の、亂れあいにし枕にはかつら草をぞ思ひ出す。彼のほのくくのほのぐらき、黄昏早く寢し時はかやつり草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて起つ轉びつさどめして、相撲取草を思ひ出す。通路遠き獨居の、班女が閨の寂さは、茶引草をも思ひ出し、心細しや糸薄、歌ゑいゝゝ風かと聞けば山の下には嵐吹く嵐吹くさりととは嵐吹く。山をはなれて風と成かぜも昔に吹き歸れ」眞ヤ

うそ汚れ一海よ
これ

ひけた一あくれ
を取る

詰開一談判

目はじき一目く
ばせ

十面一避面にて
苦い顔

見ゆつかれ一見
て居れ

じやうるり待やく、舟も留い。なんと皆は氣が付かぬか。先から陸を見ればうそ汚れた八丈島に、花色の羽織茗荷の丸の紋付で、編笠著たる男めが、道頓堀を乗出すから此舟に目を放さず、跡へ下れば走り付、先へ抜ければ立ちとまり、付て廻るは合點いかず。ありやく又彼處に立たるは、喧嘩仕掛ける躰と見た。黙つて居るはひけた事、あがつて一ツ詰開かん」と脇指押取出んとすれば、島引留め、「ハテはでな人様じゃ。私等が様な者が乗た舟は目に立つゆへ、どれに限らず皆見さんす。なまなか咎めて一本かたけ恥かこより、ハテ彼方から見んなら、此方からも見て大様にして居さんせ」と、いへども更に聞入れず。駈上れば續いてあがり、見ればいよく間夫の男。「これ市様」と、いはんとせしが目はじきして、「是申此方は他國のお衆じやぞ、所の衆なら粹である。何を言懸けさあんしよと云分してくだんすな。何方の爲にも悪いぞ」と心を揉むこそ道理なれ。貞は肘はり十面作り「こりや編笠、五度や三度は堪よふが、どふした事に舟につき、女を乗せたる船中を見るも大方圖がある。夫程見たくば近くへ寄て見られに來た。サア我が存分に見ゆつかれ。見よふが悪いと免さぬ」と、聲をなまつてりきみける。市郎右衛門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさをばかりなれば、口論しては如何ぞと、並イ

冷にも云々損
にも得にもならぬ

事觸れ―神主姿
にて吉凶を占ひ
國中を觸歩くも
の、此章は用明
天皇職人鑑四卷
にある文句の作
りかへ

もつかない―殿
めし
てつかちな云々
―大きな光物、
大燕貞をさすか

ヤ申別にお腹の立つ事共存せず。我らも下地淨るり好折々稽古仕るが、此さんろの道行は戀を含んだふし付なるに、たゞいま今今お島様とやら遊ばした淨るりの、ふし節は少も變らねども、情を御存じない故か、誠の心少ふて御眞實の無いゆへか、如何にしても道行が淨氣に聞えて、そこい底意に戀がござらぬ」と片眼でお島を睨にける。男冷笑ひ「ヤア吐すまいく、島が淨るり能かれ悪かれ、己が冷にも熱氣にもなることか。どふでも外に様子が有ふ。但し又己がいふ戀を含んだ淨るりの、語り様を知つたらば只今爰で語つて見よ。節が違ふと打据るがサアなんと語らふか」まかりで再何が扱御所望ならば語らいでは。則ちさんろの四段目檢非違使が鹿島の事ふれ、島様とつくとお聞なされ。「是やこなたへ御免ならふ、是はお島ではござらぬ、お鹿島大明神より罷出た事ふれでござりや申、惣じておかしまとも申には、上の客が卅三人中の客が卅三人、拙者が様な見る影もない粕客がたつた一人。正月七日神前に於て、おやおつかかない誓紙を書くその誓紙の文言に、斯様に申交すかは、みらい未來までも變るまい虚をつくまい隠すまい、つごめ勤の間外に深い男を持つまいと申起しやう、とりかは取交すから偽は申さないと存じ、しむび盡す程にける程に只今は向臈からでつかちない光物が飛で出で、きんちやく巾著の扉が八文字に開け、しんめ内の首尾が八角にわれ、たいこち神馬のお馬の幫間

もか島一も島
氏子一市郎右工
門をさす
紋日云々一節句
の入費を負擔さ
す

ひき日一女郎の
休み日
むくり一蒙古烏
勾麗にてむしり
取りなどの意

ぎしむ一りきむ
(俚言葉覽)

よねづか云々一
遊所通ひする、
柄を握るは當道
を好みて道をた
しなむ心(色道
大鑑)

にも見捨てられ大恥をかいてござある。されどもおか島大明神氏子を不便とも思召さず、或時は餘國の大じんぐうに身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせ、ひき日の立前跡から剥る禿頭、親里の合力などと申て、やつかいしつかいむくりの上手ごかしにむくり取られたとの御詫言、無上しんれいしんたう加持「是これが眞實戀のある淨るり、鳥様よふお聞きなされい」とよそながらこそ恨みけれ。男は二人が目色を見て、眞はて扱變はつた文句じやの。なんと餘國の大盡に身請の談合とは珍しい事ふれ。これお島和女は今のが面白からふが此眞は耳に立。迎も所望しかよるからはまあ一節所望致そう。お島とお身とが連節で戀の籠つた淨るりを、初段から切まで語り抜かせにや堪忍せぬ」と、ぎしみまはればお島一人が氣を苦み、「是申こな様程の粹様が、是は又氣のとをらぬ。彼人と私と譯ある様に見さんしたそうなれど、みぢんそんな事ではない。腹立てさんすを面白がつて、法界悋氣に言はんすわいの。おとなしうしてサア舟に乗らんせ」と、手を取れども聞入す 眞いやくおつしやれなく。他國から上つて此大坂で、よねづかをも握る者が通例の男と思ふか。どうでもこうでも聞かにや置かぬ、語らせねや置かぬ」と堪忍せぬ顔付に、お島は難義手に汗握り、「是爰な人も誰か知らぬがよつほどな。勤する

ますらういかる
だのますらとて
外道の道士、職
人鑑にありて此
處もその作督へ

はし〜云々
場末の暖味屋
濱の納屋―納屋
のかげにて柄を
賣る辻君に成下
る

けんびいしし
檢非違使勝舟、
あらより又例の
作督
まい合―眉間

身が客に引かれ芝居へ往たが、珍いか、船に乗るが不思議な。淨るりは其許より私が能ふ覺へて居る。晩に此方の見世へおじや、よふ合點のいくよふに、教へて遣らふ」と世話やけ共、市郎右衛門もいひ掛り、「いや〜、此方に習わいでも、此方の胸中にある淨るりは、此鼻が覺えて居るお聞きやれ」と、扇を拍て、「扱もますらが此目の玉ぐつと脱出、花人親王の蜷川の御所の躰とつくと見届候へば、まのゝ長者同前の大銀遣に思はれて、金銀小袖を仕て囉ひ深い男を振捨、登り詰て揚句には姫君を請出すとて、料理獻立表替眞最中と見て候。兩人が中へ、某が毒氣を吹込み男と女と不和になし、同士戦の口舌をさせば姫君は見放され、はしぐのくら屋へ下り後には濱の納屋の影、一本立にて候、と語りけるこそ不思議なれ。なんと此節に違があるか」といひければ、眞ヲ、よい推量追付お島を請けて見せう。なんほ急ても張合ふても金で語る淨るりは、少と喉に詰らふぞ。こりやは見よ」と、お島にしつかと抱き付「なんと腹が立か」といへば、又扇の拍子を拍て、而「あら不思議やますらが行ふ魔法の形、天上に現れ出異形は手を伸べけんひしが、まい合を、破て退けとはたと打つ。ハア拍子に掛つて麓相〜」眞ヤアおのれ打たぞよ。最聞かぬ」と立上るを、島は絶つて「なふ情なや。是私が詫事じや。エ、供の衆

いわれざるゝの
らざる、爰も作
習

しどなししだ
らなし
うつけた一打と
控伺とかく
はのふと一人
九の歌をとる

其名はいはじ
俗傳の物はいは
父は長柄の橋注
泣かずは雉子も
射られざらまし
の歌を取る
眞ぶろう無頼

氣が利かぬ。船頭衆頼みます。舟に乗せて下んせ」と、泣叫べば人々は「折も悪し場も悪し。是非御堪忍く」と、むたいに舟に抱き乗せ權を早めて漕出す。猶舟中より聲をあけ、眞銀は持いでいわれざる、戀の意氣地の淨るりだて、身が前では措てくれ。おけおけくや」と、舟端敲き手を敲き笑ふて舟は上りける。市郎右衛門四邊を見廻し、「ハア、我ながらしどもなや。氣が違ふた南無三寶、一期と思ふ女房を我物顔の見憎さに、苛つは戀の癖なれ共、思へば口惜こうせいでも、三匁では彼頬をうつけた事と思ひやせん。島が心の恥かしや。氣遣ひかけし可愛や」と、見送る方もほのふと明石の客の乗る舟に、お島も隠れ島隠れ蜆川へと三重

中の巻

こがれ行く其名は云はじ名を問へば父は長柄の田地持、市郎右衛門が弟善次郎なれど悪性者、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のふうくにて、夜歩行日歩行とほしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ躰をば親兄に、これみやの前大根を、荷ふて家路に戻りける。斯る所へ下男つかくと寄て棒鼻取り、「申善様、これお見忘れなされたか。毛馬屋

とほし一色をお
さりて
幾際一幾節季

断りました一念
ついた
あざにして一掃
ひて

しちごかし一正
直ぶりて言ひく
るめること、鼻
紙の色の白きに
かく
仕着—着物拵へ
てやらう

御人壁—富家の
子息にも似ぬ
利啖云々—利息
が段々重なる事
あどるは泥鰌の

の七兵衛。エ、お前は譯の悪い。術に依て待ならば待まいものでも無けれ共、幾際か／＼
今日遣らふ明日遣らふ。假初ながら五百目餘り五匁も埒明かす。夫に夕も鄰までお出な
され、此方へは音信なし、あんまりな爲され様。今日は親御様へ直に申して取て来いと
旦那が申付ました、断りました」と入所を引留て、善、こりや聞えぬ日比の己じや知ら
ぬかい。五百目や壹貫め今でも遣るは合點なれど、親仁が手前をあぢにして末永ふ出よ
ふ爲、少しの銀を延引した。そちが差配で二三日何卒頼む。ヤアいつやらの紙花も思ひ
の外に遅なはり、面目ないく。これも拂と一度に遣る。今改めてこりやばつとうちな
をすは」と、捻て出せし鼻紙のしちごかしこそ笑止なれ。所へ駕籠の長介来り、「私が請
合の菱屋の花代津の國屋の料理代、合三百四十五匁六分、扱もくせがまれます。其
上お前は當もない花車や娘仲居にまで、仕著をして取らせふと約束計でまいらぬゆへ。
私かちうでも取にかと毎日毎夜の使立、内はやうぢう師走にて何共迷惑仕る。今日は
是非に請取ませふ。それに成らずば、親旦那へ訴訟申」といふ所へ、五十餘の女房綿帽
子にて顔包み、「編笠島の笹屋の鼻でござんする。御じんたいとも覺へませぬ。我等が僅の
商賣の元手も利喰ひの月おどる泥鰌汁のしゆらい代」とり切間は何所迄も著き纏わるよ

録
しゆらい代一諸
雜用、集禮とか
く
すつきりーすつ
かり
九兩一呉れろに
かく

どうそろう十三
にて中津川筋に
あり
國島一柴島にて
長柄の北
腹いる一腹立を
慰める
も霜月一頭の白
きに掛く、報恩
講は十一月廿二
日より七日間に
行へば也(俳諧
歳時記)
も茶所云々一御
本山へ上る賽錢
の事

藤の棚、谷町からと云ふもあり九間の駕夫が揚錢の、残りも今日はすつきりと取て九兩二分の銀。道頓堀の水茶屋の、或は餛飩儉餛のそばで聞さへ笑止なり。善次郎もて扱ひ一尤掛は負たれ共、節季でも有事かつきともなひ今日に限り、此様にせがむのは。ム、合點じや。兄市郎右衛門のうつけもの、天満屋のお島にぐはらりと片鼻うちあけて、親仁の機嫌散々にて半勘當の身となつた。夫を聞て我迄を氣遣ふと見へたが、兄とは各別こんな銀譯悪ふする男でない。親仁にいふならいふて見や、一文にも成まいが。遅ふて此月一ぱいに濟まそといふから虚はない。ちうそう國島北南の長柄で男といはれたる。善次郎じやがなんと見た。僅二貫目内外で捨てる善次が名ではない。親仁にいふて此善次を勘當させて腹いるか、但は自然に銀取るか勝手次第」と投出し、立派にいへば掛乞共「いかなれ虚は長柄川、砂にはよもや成るまいぞ」と、幾日々々の日切して皆々宿所に歸りける。親介右衛門は六十餘頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢残らず爰に持ち集まり、お勤過ぐれば表に出て介右衛門云ひけるは、「何も講中有難いと思召せ。毎年のお霜月懈怠もなふ上ぐる事、自力では叶す御恩どくのおかけなり。扱去年の通り此銀を兄市郎右衛門に持たせて京へ遣る筈なるが、在所で沙汰も聞かれつらん。新地狂に身

どれい—返事の
詞どれよりの略

あたじたるさい
—あたは罵聲い
やにしつこい事
鼻紙袋—四角に

躰あけ、方々の借錢堤際の田地をも、七百目の質に入、四貫めの手形したと聞。斯した性になるからは一錢も持たされず。あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒明かず、身共が上りませふ」といへば、弟は律義な顔つくり、「太儀ながらそうなされ。ア、何も、性の能い兄きにて、年寄られた親仁の苦勞でござる」といひければ、講中「夫はきやうがる今聞た」と頭を振り顔を擧めける。介右衛門重ねて「白銀五百目貳包、小判廿五兩壹歩合せて四十切、改めて預つた」と數讀み揃へ懷中より、掛硯の鍵出し引出し開けて、金銀取入錠おろし錠を袋に入にける。時に表へ駕の者「頼みませふ」と云ければ、「どれい」といふて妹のお吉、「何所からの使」といふ。「私は蜷川天満やのお島様より市郎右衛門様へ急な使に參つたり。此文進せて下されませ」と高聲にいひければ、妹「ア、爰な人高い聲さつしやんな。兄様は夕べから未歸られず、私が預り届けませふ」翼お歸り次第頼みます」と云捨てこそ歸りけれ。介右衛門聞付て「お吉今のはなんじや」喜「イヤなんでも御座りませぬ」翼「なんでも無いとは己等迄が一ツになつて親の目を拔居るか」と、文捨てたくつて「是は何も、田地賣らせた女めが、市様まいる身分とは、はて扱々あたじたるい。皆の手前面目ない。待て己どふする」と、鼻紙袋へ文をも入、ぐるぐる捲し小撚より、

鑷ひ紐を付けた
る紙入（脚の糸
巻）

我とおびえ―自
分から吃驚する

どうてん―動轉
にて驚く事（但
言集覽）
心置―遠慮する

細きお島と一命の終る端とぞ成にける。講中も挨拶なく「男の子は何處もそれ。先お暇申ませふ。なんと太郎兵衛若い衆がよね〜といふ程に、何様した事と思ふたが、田地を賣つて買ふゆへに、それでお山をよねといふ。今講釋が聞えた」と、堅い輕口いふて歸れば、介右衛門も苦笑ひ、奥の間にこそ入にけれ。善次郎は只一人外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の銀に性根を奪はれて、そろりと立つて錠前を押して見引で見捻て見て、奥を覗き表を見、箱口取てもち上れば、慄ふてどうど打落し、我とおびえて飛上り、種々様々に盗み様工夫すること恐ろしき。善ヤア、忝い鑑の入たる鼻紙入親仁が忘れ置れたり」引解き鑑取出しまんまと明て、鑑は元の紙入に初の如く納め置、掛硯の引出明け、二包の白銀を下、懐へ押込んで、小判は頭巾にぐはらりと入、裸壹歩を手に握れば、奥より親の聲として、「善次々々」と呼懸くる。善「あい」といへ共此壹歩置所にどうてんし、口へ入たり目へ入たり狼狽廻つて釜の上なる御酒徳利へ、ざら〜と移し入、親の前へぞ出にける。斯る所に市郎右衛門、内へ歸れど敷居高く、心置るゝ家來迄何も野畑へ出たれば、誰に首尾問ふ便もなく、上り口にとほんとして、寒さは寒し酒壹ツと膳棚捜せど酒もなし。而ヤア荒神の御酒がある。冷でも壹ツ戴ひて、胸のもや〜はらさ

三寶荒神一龜の神

機嫌さんぐく
散々に不機嫌

よくも知らせ
よう知らせて
くれた

見いれ一魅れ
よの悪性一他の
女狂は誰もある
故許さうがと也

ん」と、茶碗引寄せつぎければ「こりやどうじや。酒の中より壹歩が湧く。寶の泉か有
難い」と、皆打明けて「是は夢か現か、三寶荒神の御利生か、死したる母の御授けか」と、
嬉いやら恐いやら分別に能はねども、「久々で金けに逢ふた。先めでたふ壹歩のうは汁吸
ひませふ」と、戴きくぐつと飲み、壹歩を紙に押包み、懐に納めける。黄金は人の身
を富ます寶なれども此身には、命を刻む刃となる善惡こそは哀なれ。所へ善次ひよつと出
「ヤア兄者人お歸りか。推參な御異見なれ共、お身持がそうでない。親仁も機嫌さんぐく
のうへ、蜷川の何處からやら、悪い所へ文が來て親仁が見付、それそこな鼻紙袋に入置
かれた。我らは南の御堂へ親仁の使に參るなり、跡で首尾よふなされ」といへば、市郎右
衛門は肝潰し、是はと惘れ居る中に、善次は密と後手に、御酒徳利を隠し取、表に出て
押し戴き、一さんに駈出し心の内こそ笑しけれ。斯く共知らず市郎右衛門、常々不和成弟
の、流石恩愛なればこそ能くも知らせて有ける、と鼻紙袋の紐を解き文を搜す所へ、親
つかくと出後に立て、「それは何する市郎右衛門」市はつとと驚き飛退り差俯伏てぞ居
たりける。介右衛門聲をあけ、「己は天魔が見いれたか、佛罰が當つたか。よの悪性は若
い者有らふ事ともいはれうが、あれ掛硯の口明いたり。鑑を入たる鼻紙袋明けて我に見

身が銀一銭が金
己が云々汝を
生かして

とざま一外様、
公閉の詮議さす
るは公明正大

大口小口一口幅
の利く

憎いが餘つて一
不肖の子程可愛

付られ、仰天するは盗人な。身が銀ならば親の慈悲沙汰なしにもして遣らふ。身の油にて講中が、御開山へ奉る御茶所の銀じや盗人め、一文一字違ふても己が生けて置れふか。我等一人は縁者の證據それく講中組中」と、呼ばはる聲に向い隣、一在所が駈集まりとざまの詮議ぞ是非もなき。介右衛門大きにせき、「サア何もの目の前で、掛硯を開かん」と引きだし見れ共金銀は、一錢とても無かりけり。介右衛門地團太踏み、涙を流いて「エエ口惜や、何代か此家にごごとの有つた例もなし。歳六十に及んで一在所といひ講中の大口小口動かする、己計が恥と思ふか。盗人を捕へて見れば我子なり。此手間で是程の能い事を仕たならば、親の身ではどれ程の自慢であらふと思ふぞやれ。成人の子を持つてば親の心安めぞ、と人もいふに己には、寝た間も心休まらず揚句に斯る大事を仕出す。内でこふした心からは、外で何がな仕置きつらん。誰に似て此根性、憎いが餘つて不便なり。不便の餘りの憎さや」と地そらを叩いて無念泣、實に尤に憐なり。市郎右衛門顔を擡け「鼻紙入は明けたれ共金銀には手をさよす、盗人は外にあらん。心を靜めて御穿鑿」と、泣くくいへば飛掛り喰付て「エ、腹の立、盗をする子を持つて、なんも心が靜められうぞ。親の心を知ぬか」と懐中捜せば以前の壹歩、「是を見よ」と打ちつけて、大聲あけ

はつと一わつと
と讀むか

四十二の云々
四二に二を加ふ
れば死々の香と
なる故思む

じんぎ—仁義も
欲もなり

湯を沸し云々—
折角育ても役に
立ぬ事、水入
らずは踏き者の
交るは油に水の
交るが如しの意
にて親しき同士
に云ふ(俚言葉
覽)

てはつと泣き、「假令千兩萬兩でも銀惜いとは思はぬが、廢る己が名が惜い。近比面目無
けれ共、人々も聞てたべ。此奴はとづくに殺す奴なれ共、今ならでは申さぬが、元我々
が實子でなし。大坂の去人の四十二の二ツ子にて、産屋よりもらひ守育て、後に弟が出
來たれ共夫には替す可愛さに、育てるに従ひ性悪く、勘當せんと思ひし事五度三度には
限らね共、若や己が癡心に養子といふ事知るならば、眞の親なら斯あるまいと我々夫婦
を疎みやせん、と義理も有不便もあり、殊に母が最後にも、弟より彼兄を繼母に掛けて
呉れるな、といふて死だは小耳にも定めて覺へて居ろふぞや。じんぎもよくも身の上も
本子には忘るゝに、其本子より己をば大切にせしかひもなく、湯を沸かして水いらすの
親の内で盗をする。是は如何なる性根ぞ」と聲をあけて泣きけれ共、子は覺へなき事な
がら云譯も無きしだらと成。親も道理子も道理、心にこもる哀さの兩人の涙堰きあへず、
と父かふいふも恥の恥、勘當じや出てうせふ。親子名残の形見の杖、身に覺へよ」と追
取つて、さんぐくに打ちければ杖は中よりふつと折る。飛掛つて踏む所を妹下人緇付、
泣くく奥へぞ入りにける。市郎右衛門涙をはらくと流し、「何も申事はなし。親なら
ぬ親子ならぬ子、眞實の親子にも勝つたる御恩徳、いつか報じ申べき。疾にも斯様に承は

らばいか様共、孝行の盡し様も有べきに、口惜さよ後悔さよ。産の親は見す知らず養親には不孝を爲し、此市郎右衛門めは親の罰が當つたり。切て心の念願にて死して再度親子と生れ、今の御恩を報じたき其しるし、此杖の片折を未來の形見」と推戴き、「いかに講中組中も今生の暇乞、頼み申すは親の事。孝行盡せと妹に傳へてたべ。死するとあらば御回向も頼み申」と言置も、涙ながら餘所ながら見置きながらのはしばしら。朽行身こそ三重

長柄の云々遮
莫名のみ長柄の
橋柱朽ちずば今
の人も忍ばじ
(玉葉集)

下の巻

観川一橋をかりて深草少將の故事を含めたり
瀧枕一早瀬の波が枕を打返す機にも島が數多の客に接する事
花香一茶の香色の衰へぬ遊女
歌人一貫之

哀なり、逢初し一夜を戀の水上に、三夜四夜五夜十夜百夜、通ひ車の蜷川、變る瀧枕沈む淵、思ひ二ツの中町や、更て苦む待宵に、明る詫しき別れ路の、憂を續木の梅田橋、うめてさませと色茶屋の、色の出花の里ぞとは、醒ぬ花香を汲みてしれ。實にや士農工商の、品數々の其中に情で賣れば情で買ふ、歌人の評判つけ置し、能き衣著たる商人も誠を守る天満屋の、亭主は外より歸りしが、「なんと女子共は仕廻ふたか。島は今宵はどうした」といへば、「島様は今宵は長柄の市様とて、馴染の御客が久しぶりて、近江屋迄見えまし

能き衣著―此譬
古今集序文にも
り

とつかは―急忙
みめ―はまれ

おふせて―かぶ
せて
びらくら―借金
のどさくさ
なま―酔どれ
戸をたつ―死ぬ
る決心

て、夫で島様も近江屋へ送りました」といひければ、亭主扱こそくそうあらふ。今宵丸屋のうたひ講に往たれば、町衆の話に長柄の市郎右衛門といふ人、報恩講の銀を盗み親の勘當うけて、白晝に在所を追拂はれた。是も此方の島ゆへじやと女夫池で聞て、知らぬかといはると故とつかはとして戻つた。前のおはつに懲果てた家名の出るも迷惑客を倒すがみめでは無い。商賣せいでも大事ない。それ早ふ呼に遣れ」と、喚き散らせば女房も、「エ、皆も氣が付かぬ。こちにいはると事かいの。又淨るりに乗しやんなや。早う連て戻りやいの」と、女心のせはくし。譜代の下女は門より入り、馬市様は、馴染ゆへ遣るは私が遣りましたが、勘當共ふんどう共、知つたらなんの遣りませふ。たつた今も近江屋へ往て見たれば、島様はきつう酔ふて居さんして、何をいふても譯がない。そんな事なら戻しませふ。お初様のかの夜さり、二階の梯子を踏み外し、己が胴骨踏まんした、形見の痛さが漸と、此比止んだに勿躰なや又踏まれてはならぬぞ」と、駈出してこそ走りけれ。斯くて弟の善次郎は兄におふせて銀盗み、所々のびらくらを仕廻はんと此所へ來りしが、お島は酒に酔ひくづおれ、ひよろりひよろりとなまになり、近江屋出て濱筋や、今宵一ツに三途川越えんと思ひ詰たれば、心にはたと戸をたつる風呂屋の前に

手が悪い―仕方が悪い
ごあんして―心易くお出になつて

けなりや―鉄ましろ

かたみ―半身

いて―往きて

て善次に逢ふ。ひらりと外すをちらりと見て、「是善次様く、手が悪い」と、よろくと縋付て、鳥此方さんな聞へやせんぞゑ。前はさいくごあんして、何が恐ふて逃げさんす。是兄嫁の鳥じやいな。たつた今迄近江屋で兄さんと逢ふて居て、今日の様子を聞きやした。大事のおれが男が勘當請けてござんしたりや、胸が痛ふて少の酒で舌が廻らぬ。此方さんは弟の身でけなりや機嫌が能さそうな。禮いふ事が有、ござんせ」と、胸倉取て引て行く。善次は「何も頼みます。頼みます」と仰向にそり、引ずらるれば下女男、「是は鳥様なんぞでいの。サア内じやはいらんせ」と、無理無躰に押入るれば、上り口にひよろくと、かたみを頓と横に投げ、「水給や」とて伏にける。「夜こそ更くれ」と一町の行燈仕廻へば天満屋の、締たる門口暗夜に善次は鳥が心根の、恐ろしければ格子の影、身を引きそばめ立聞す。市郎右衛門は近江屋の目目にせかれ云々と、死際の契約せず便もがなと門に立、弟あり共知らざれば弟は兄がある共知らず、傾く月に東向き暗き格子を隔にて、内の様をぞ聞にける。亭主夫婦これを見て、「鳥はいかふ酔ふたそうな、是いて休みや、お鳥く」と茶を汲で、「一ッ呑みや」といひければ、鳥「あいく、こりや忝い」と戴きて、「ほんに誠にお主たる身が勿躰ない、大事に掛けてくださんす。是を思

いり譯云々一理
由を述べるもの
にあらす

生身は死身一謎
生あものは必ず
死す

へば勤の身が心中などで死するのは、お主へ對してぶしつけ、損を掛けるは身の罪科。去ながら死だ者が生返り其いり譯をいふにこそ。命に替る者はない。夫を捨て身を果すは、いふにいはいはれぬ詰まつた事、憎まふ者でもござんせぬ。斯ういふて私が心中する氣は無けれども、爰にも前の初様に手ごりの事も有故に、こりや前書の話ぞや。私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住居もならぬとよ。これはなんたる胴慾ぞや。私等が今の此勤、だてにもはでにも身の爲でも一日片時成事か。親兄弟のいとしさゆへ、面白からぬ勤をも、つらいと一度いひやらぬは、親兄に苦をかけまいため。斯程大事の親里の貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れね共生身は死身、殊に又此比酒に當てらるよ。若頓死でも致しなば、下された茶が末期の水」と、管まく躰に紛らかし、わつと計に堪へ兼ね、しやくり上げたる泣上戸と人目に見せし下心。市郎右衛門は忍び泣、弟は身の悪願て、恥て悲む悔み泣、心は三ツに替れ共、同じ涙に曇る月、時雨の暗夜の本意なさよ。人影見てや町内の犬吠渡れば兄弟は、見付られては悪かりなんと、西東へぞ逃げ去りける。亭主夫婦は氣も付かず「管をまかずと早ふ寝や。皆々仕廻へ」といひければ、「あい」と答へて箱梯子、上りかよつて、且那様内義様、みんなさ

火打が禁物お
初が心中の時火
打たるに懲りし
故

發起—後悔

らばやく」と云捨て二階あがに上りける。下女は見上げて、玉ハテ小きびの悪い聲つきじや。長兵衛門もよふ締しめやや。有明ありあけの消えぬ様に油もたんと指さいてたも。消へてもこちは火は打たぬ、己おれには火打ひうちが禁物きんぶつじや。打音うつおと聞てもぞつとする」と呟つぶやきてこそ臥ふしにけれ。稍すこ鎖しごまれる小夜格子市郎右衛門は立歸り、軒の下にてしはぶけば、お島は夫それぞと二階の窓まど覗のぞけど我が姿は見えじ聲を立べき様もなく、柄えつけの鏡差出かやみきしだし、星影映ほしかげつしてひらめかし、爰のこに有とぞ知らせける。夫も心得扇こころえを抜き、聲立てられねば金物の光に物をいはせては、招まねき合あひく我われと我身わがみを抱締だして齒はを喰詰くひつめて歎なげきける。深き思ひぞあぢきなき。弟の善次郎島が詞ことばに發起はつきして、悪心を酬ひらがへし兄の命いのちを助けんと、爰こゝ彼處かしこと尋ね歩き、元の格子かいしに走り付、兄は人ぞと立隠たちかくるれば善次郎は門かどを叩たたき、「長柄なががらの市郎右衛門は是には居ゐられ申さぬか。近江屋にて尋たづねればはや歸かへられたと申さるよ。御存ごぞんじないか」と呼よばはりける。内よりは「喧やましい、夜更よふけ廻まつてそんな人は知らぬ」といへば、「南無三寶なむさんぼう」と走り行。斯くと心を語りなば、死なで止みなん二ツの命いのち、隔へだて疑うたがふ因果と因果、定まる業ごふぞ力なき。再また彼奴きやつ追お駈かけて討うつて捨てん。いやく見苦みぐるし最期さいごの邪魔じゃま」と、心を鎮こめ小聲こごゑになり、「サア夜明よあけも近ちかづく人立あり、一所と思へど詮方なし。我は在所ざいしょの堤つゐにて最後さいごの所は

残し置く云々
市の魂は二階に
残し島の魂は市
に連れ添ふ

陽炎一陰にか
く、蜂蛸は朝に
なつて生残るも
あれど市等は生
きぬと也

書集め云々一會
根崎心中をさす

替るとも、連立つ道は唯一筋。今より數珠を繰初て、一萬遍に終る時夫が互の合圖ぞや
追付待つ」といひければ、島「合點しました、去ながら、同じ枕に死たいなあ。心はつ
いて往きませふ」市「ヲ、我とても其一階、顔を竝べて死たいなあ。心は跡に残るぞ」とあ
こがれ出る玉の絡の、互の目には見えね共残し置のと連行と、兩刃に死する剃刀の、一
ツ刀の亂れ焼亂れ心は 三重

血死期の道行

鉢ケ、死神の導く道や陽炎の、はかなき虫も偶々は、朝の露に生残る、夫よりも猶あだ比べ、
是を限りと百八の、數とる歌たびに繰盡す命二ツを數珠二連、是が冥途の迎ぞや。見送る
軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星、行て歸らば言傳ん。出て返らぬ魂の、あこ
がれ添ふとは知らねども傍に夫の有心、夫はお島と連立ちて歩む心の伴連は、目にちろ
ちろとまほろしの此は其人か、實か、と抱き付ば仇し野や、風ほうくたる閨の戸に、島「ど
れ市様は」市「お島は」と尋る袖にふる涙、夜半の時雨となりにけり。是こそ會根崎天
神の、松と棕櫚との連理の森、書集めたる言の葉の、餘所に聞きしも今は又、餘所に嵐

鹿窟ろくく一畜生の
中尤も夫婦仲善
き故に云ふ
女夫池にょぶち一天満天
神の北にあり、
夫婦にかく

懸にせぐり云々
一戀の爲に出で
んとする魂が二
人の思に引寄せ
らる

の身にぞ染む。お島も同じ我庵は、歌お初徳兵衛のそのあか月の、夢も破れてまだ間も
ないに、心中すくせの報の業か。夫のみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死
せて見て居られうか。女房先立て存生あらば、それや犬猫も同じ事。同じ中にも鹿とな
り鴛鴦うんおうと生れて女夫池、生る間もなく身を果し猶や藻屑もくろに埋まんと、又一向の憂涙、落
ちて三途さんずの川となる。男心もくれはてよ、西か東か何處ぞと、月に向へど我影の、映ら
ざるこそ不思議なれ。女も向ふ灯火の、壁にも窓にも障子にも、我影見へぬ怪さよ。ア
アあぢきなやはかなやな。誠や人の物語に、死する時節は人玉飛んで、其身の影の無き
と聞く。而な「嘘やお島も」島「市様も」かくぞ最後の近くと、合圖の珠数の念佛の、一萬遍も繰
詰て、九千遍にぞ早なりぬ。心細くも便なや、今千遍の命の内と、思へど我身は思はれ
ず、先には如何いかにぞ、と案じ交せる互の形、茫然とこそ現れけれ。夢か現か空蟬の、
もぬけの玉とも知らばこそ。こは何としていつの間に、一所に死ん嬉しや、と纏れ取り
つき縋り合い、誠の形影の人、歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緒の、己が
思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、鏡に映す如くなり。月は白みてあか月の、あ
れ明星も差昇る。近く最後一筋に、一ツ蓮と願へども、思へばく我身のとが、養子

吉原、梅田一藝
場、くゆるはふ
すぼる意
六ツの巷一地
獄、餓鬼、畜生、
修羅、人、天

の親には疎まるよ、誠の親のありとても、親知らず子知らず、假令冥途で逢ふたりとも、何を證に誰をか見ん。悪業深き我身や、と聲をあけてぞ泣居たる。お島が心の歎には、一人の母の老の世に、いつかお主が年明きて、切て一日片時なりとも、湯水取られて往生せんと、是のみ一ツの願なりしに、病で死するは是非もなし。いとをしや母様の、薬香め灸せよ身養生して勤めよ、と大事にかけて下されし、此身體をば血に染めて、明日は堀江へ使たち、呼寄せ母の目に見せば、死入る様の歎の顔、今見る様で聞く様で、思ひ過しの胸の中、五體の涙締寄せて、手にも袖にもせき餘り、漲る瀧に異らず。爰にくゆるは吉原よ、あれにふすぼる梅田のはか、他の無常の煙を見るも、明日は我身も何處の雲、何處の煙と立のほり、誰に此骨拾はれん。冥土は六ツの巷ぞや。迷はぬ案内彼の煙の、消えざる内に我々も、と夫が脇指抜く形、島がまほろし後れじ、と用意の剃刀横たへて、更「サア只今ぞ、一足も早かるな遅かるな。手に手を取らんと思へ共、未だ死で見ぬ死出の旅、連れだどふやら連れまいやら、逢はふやら逢ふまいやら、二度生て生顔を見るは此世の限か」と、物をも云はず面影の、顔をしばらく見合せて、わつと消入泣居たり。更「ヤア後れるな」島「後れませぬ」更「合點か」島「合點じや」更「南無阿彌陀佛を忘れま

のつゝ一仰向け
一そく云々一
息にて息断れる
と同時に血のめぐりが息む

いさよう一十一月十六日

川端一長柄川邊
生死二枚一市の
死んだ死なぬの
二枚の繪双紙を
賣出す

い」島「南無阿彌陀佛」と喉笛のどふえに、がはと突きたて兩手をかけて、くるりとゑぐれば兩方の、面影消えて無かりけり。むざんや二人はなから死じに。男は女の姿を尋ね、女は「市様」とのつゝ返しつ苦みの、くらむ眼まなこに手を伸べて、尋迷まよふぞ不便ふびんなる。終つひに一そく切斷せつだんの經絡けいりく六脈むくたんと絶々に、息いきの通路かよひぢふつゝと切れ、うんと計はかりを此世このよの名残なごり、いざよふ月の朝霜あさしもと、一度ひとたびに命いのちは絶たてけり。弟善次あには川端かはたに捨てし衣裳かきものと書置かき置きを、拾かひろひひ驚おどろき駈かけ付つて、見れば敢あへなく事切こときれたり。「南無三寶」と歎なげけ共、詮せんなしかいなし面目めんぼくなし。切せまては兄あにの報恩ほうおんと、恥はぢも骸からだも衣裳かきものに包つみ、負おう一先立退ひきまうきける。扱あこそ世上よこに此男このおとこ、死しんだ風説ふうせつ死しぬ沙汰さた、しやうじ二枚ふたまいの繪双紙えびつしに、戀路こひぢの回向まがをうけにける。